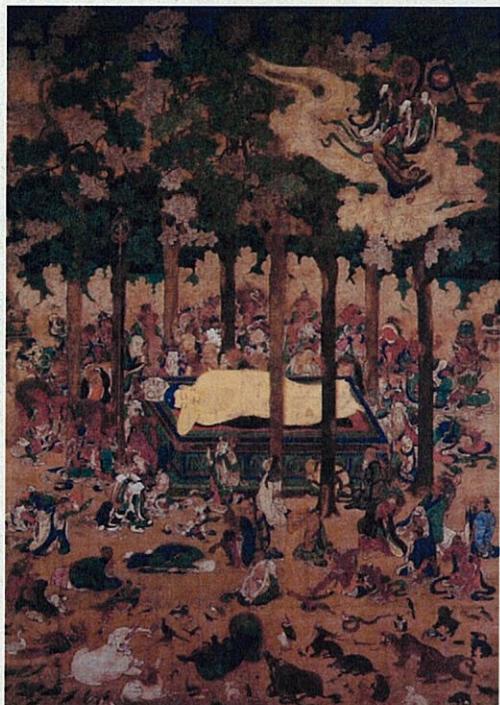


平成21年度 文化庁購入文化財一覧

【絵画】

1 絹本着色仏涅槃図

一幅



重要文化財(明治43年8月29日指定)

鎌倉時代

縦 225.5cm

横 159.5cm

仏涅槃図は、釈迦の入滅のさまを描くもので、毎年2月15日に行われる涅槃会に用いられる。本図は、縦長の大幅の中央、沙羅双樹の下に皆金色の釈迦が横臥し、菩薩、仏弟子等の会衆、様々な動物がこれを取り囲む。右上方には摩耶夫人が忉利天より飛来する様を表す。会衆の背後の湧雲の表現や青、緑といった寒色に朱や丹を添える彩色には、中国・南宋仏画の影響が認められる。釈迦に用いられた截金の精緻さも特筆される。その製作は鎌倉時代後期と見られる。当該期の大幅の仏教絵画として貴重である。

2 紙本著色西行法師行状絵詞（第三卷第六段）

二幅



江戸時代（寛永7年）

絵 32.9cm×98.0cm

詞 32.8cm×48.5cm

本作品は、鳥丸光広（1579～1638）が禁裏御本を俵屋宗達に写させ、寛永七年（1630）に成立した紙本著色西行法師行状絵詞のうち第三巻の断簡であり、絵と詞書の二幅から成る。現在知られている宗達作品中、製作時期の確実な唯一の遺品として貴重である。巻第三は、西行が西国への歌行脚の末に、戻った都で娘に再会するまでを描いた巻であり、第六段は、天王寺に参詣にむかう西行が交野の天の川にいたり、その場所が、業平が歌を詠んだ天の河原と聞いて、「狩りくらしたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり」（伊勢物語第八十二段）の歌を思い出し、涙が袖に落ちかかったと詠んだ場面である。

絵は、二紙を継いだ長い画面に、美しい色彩を賦した景物をゆったりと布置して、詩情漂う名所をあらわしている。後世の補彩はあるものの、画趣を損なうまでにはいたっておらず、宗達らしいおおらかな雰囲気を保持している。

【彫刻】

3 木造聖觀音立像

一軀



重要文化財（明治42年9月22日指定）

平安時代

像高 190.0cm

桂材を用いた一木造の菩薩像で、当初は両腕まで其木で彫出していたとみられる。その構造技法に加え、高く結い上げた髻、浅いが鎬立った衣文の彫り口、抑揚のある肉付けなどから、十世紀前半頃の製作とみられる。

納入品により不退寺（奈良市）伝来であることが知られ、同寺本尊聖觀音像（重要文化財）とともに、元来は三尊像の両脇侍をなしていたと推定される。

細かい彫り口、装身具や髪筋の凝った意匠に特色があり、奈良地方における平安時代の彫像の一傾向を示す遺品として貴重である。

4 木造能狂言面
もくぞうのうきよげんめん

百六十六点



能面 122面、狂言面 43面、面箱 1点よりなるコレクションで、南北朝～江戸時代の製作になる。

その中核をなすのは加賀前田家の支藩、大聖寺藩前田家に伝来していた一群と推定され、前田家お抱えの宝生流に関連する面が多い。

出来ばえが優れた面が多く、また南北朝・室町時代にさかのぼる古面が含まれるのは大変貴重で、能面の一括資料として価値が高い。

【工芸品】
5 能装束
のうしようぞく
すりはくせんめんちらしもん

一領



重要文化財（昭和38年7月1日指定）

桃山時代

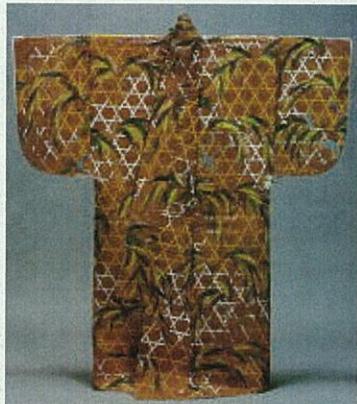
身丈 146.0cm

袴 59.5cm

茶（現状）の練緯地に、扇面文様を散らし、その間に流水を金摺箔で表す。扇面には草花文、霞、青海波などを金摺箔で表し、一部に顔料による彩色を用いている。様々な文様を表した巧緻な摺箔のほか、顔料を着彩し、金摺箔、金泥絵を施すなど、桃山時代の染織技術の一端をうかがうことができる貴重な一領である。

6 のうしようぞく 能装束 繡箔籠目柳文

一領



重要文化財（昭和38年7月1日指定）

桃山時代

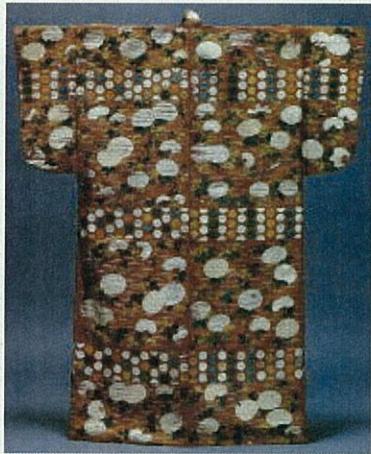
身丈 136.2cm

袴 67.0cm

茶練緯地に、黄と白の平糸で籠目を刺繡し、さらに、しなやかに枝垂れる柳の樹を同じく刺繡で表す。柳の葉の一部に金摺箔を施す。地面から盛り上がるよう張る根元や、左右にうねるように立ち上がる幹など、桃山時代の特徴的な柳樹の形態を細かな刺繡で良く繡い表している。また、刺繡の色遣い、渡し繡を主とする刺繡には桃山時代の特色が表されている。

7 のうしようぞく 能装束 繡箔紫陽花小花文

一領



重要文化財（昭和38年7月1日指定）

桃山時代

身丈 138.0cm

袴 58.6cm

茶練緯地に裾および腰から立ち上がる紫陽花の立木を主とし、その間に小花を互の目に配して段に構成する。紫陽花の背景に霞を金摺箔で表す。花や葉の形状を渡し繡した上に、輪郭や花弁、葉脈を留め繡で表したり、紫陽花を水浅葱や薄紅に着彩して微妙に変化を付けたりと工夫が見られる。身幅が広く、袖幅が狭い小袖の形態、渡し繡を主とした刺繡は、桃山時代の特色を良く示している。

8 こそで 小袖 繡箔風景四季花文

一領



重要文化財（昭和38年7月1日指定）

桃山時代

身丈 143.8cm

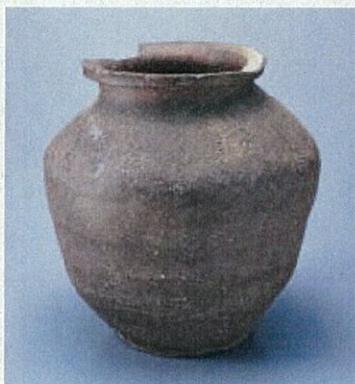
袖 61.5cm

紗綾形綿子地を黒、白、紅の三色に不定形に染め分け、金摺箔、鹿子絞り、刺繡を用いて、霞、亀甲、唐草、流水、七宝、松、鶴、桜、草花、楼閣など種々の文様を表す。本小袖は、桃山時代末から江戸時代初期にかけて流行したいわゆる慶長小袖である。精緻な文様を集合的に配する方法、抽象的な区画構成、黒を基調とするなど、慶長小袖の典型を良く示し、数少ない当時の服飾を知る上で欠くことのできない貴重な一領である。

9 古越前広口壺

一口

嘉元四年八月十七日の刻銘がある



重要文化財（昭和50年6月12日指定）

高さ 34.3cm

口径 23.5cm

胴径 37.4cm

底径 16.6cm

中世を代表する古窯の一つである越前窯の製品である。本広口壺は小型甕とも呼ばれるもので、越前窯における典型的な広口壺の形態である。器壁が厚手に成形され、緩やかな丸みを持つ撫肩や垂直な口縁帯を造り出す口造りなどにも時代の特色が見られる。重厚な作風を示すとともに、胴の肩に刻まれた銘文から製作年が知られる基準資料である。越前窯のみならず日本の中世陶器における極めて重要な作品である。

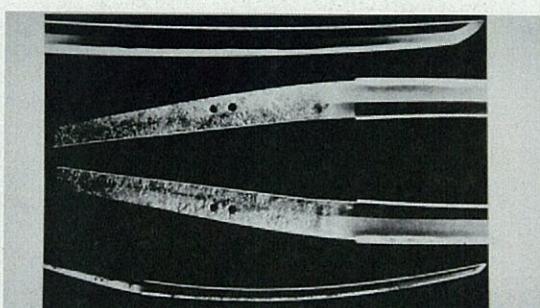
10 太刀 銘備州長船住景光 元亨二年□月日

一口

重要文化財（昭和54年6月6日指定）

鎌倉時代

刃長 78.4cm 反り 3.7cm



景光は、備前国長船の正系である長光の子で、鎌倉時代に活躍した名工の人である。

本作は、やや細身ながらも長寸で反りが高く、踏ん張りのついた健全な太刀姿を有している。特に備前ものの特色である刃文に微妙な変化がよく現れている。また、直線的な刃文である直刃も美しく、景光の作風の典型をよく示している。古刀における太刀の多くは後世に茎が磨り上げられているが、本作の茎は後世の改変が加えられておらず保存状態も優れ、貴重である。

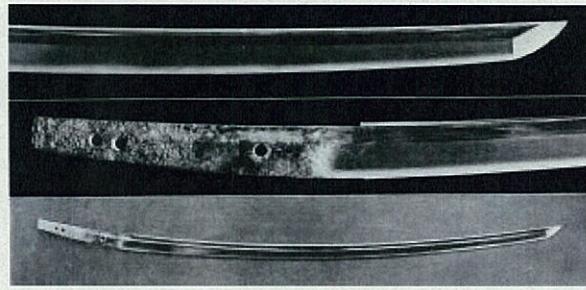
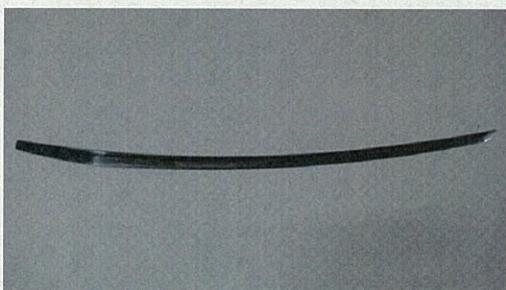
11 太刀 銘友成作

一口

重要美術品（昭和12年8月28日認定）

鎌倉時代

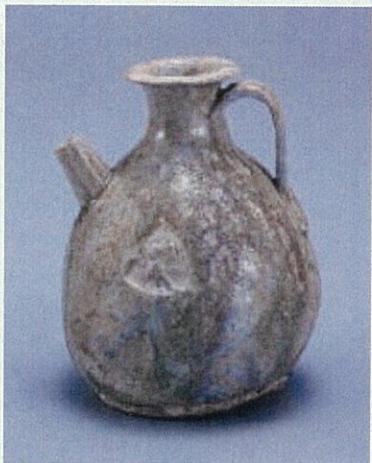
刃長 78.2cm 反り 2.9cm



友成は、吉備前刀工の中でも、技量、品格ともに秀で、古来高名な刀工の一人に数えられる。友成の有銘作は数多く、それぞれの作風の相違からも同名で数工いたと見られ、平安から鎌倉時代に亘って少なくとも三代はいたとされる。本作は、磨り上げているものの姿のよい太刀である。やや肌立った鍛えに直刃調の刃文を焼き、小乱れを交えて雅味を湛え、総体として上々の作行を示している。何れの代とは断定し難いが、高い品格を保つとともに保存状態も良好であり、貴重である。

12 灰釉手付水注

一口



平安時代

高さ 13.2cm

口径 4.7cm

胴径 10.6cm

底径 7.8cm

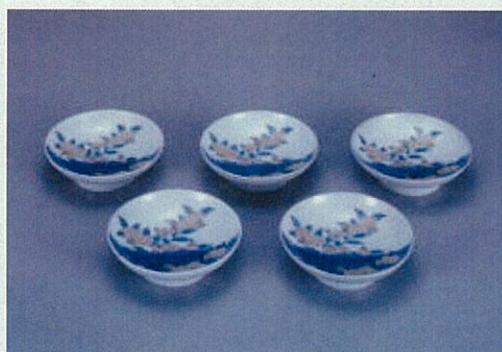
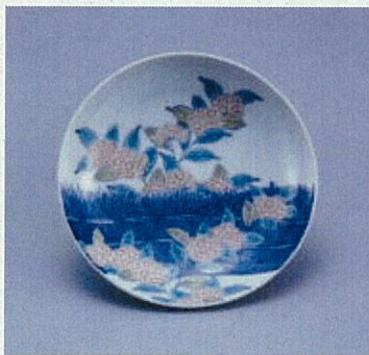
素地は灰白色で、輒轆水挽き成形した胴部に把手と注口をつけた小型の水注で、手本となった中国の越州窯青磁を忠実に模した作品である。平安時代前期に日本で初めて高火度施釉陶器である灰釉陶器を創出し、日本窯業の中心地となった愛知県日進市を中心に展開した猿投窯の古窯出土と伝えられる。釉薬がよく熔けて見事に発色し、猿投窯の灰釉陶器創出期を代表する手付水注の完存例として極めて貴重である。

13 鍋島色絵紫陽花文皿

五枚

江戸時代

高さ 4.3cm～4.4cm 口径 14.8cm～15.0cm



素地は白磁質で、全面に透明釉をかけた木盆形の中型（五寸）皿である。文様は、柴垣の手前と奥に紫陽花を染付に色絵を加えて描く。鍋島藩が直接經營に携わったことで知られる鍋島焼は、卓越した技術で優美な作風を確立し、優品を生産した。本品は、その盛期の製作と考えられ、色絵の見事な発色、典型的な鍋島焼の作風は、遺例の少ない鍋島色絵五客組皿の代表作の一つとして貴重である。

14 絵唐津芦文大皿

一枚



桃山時代

高さ 8.4cm

口径 35.3cm

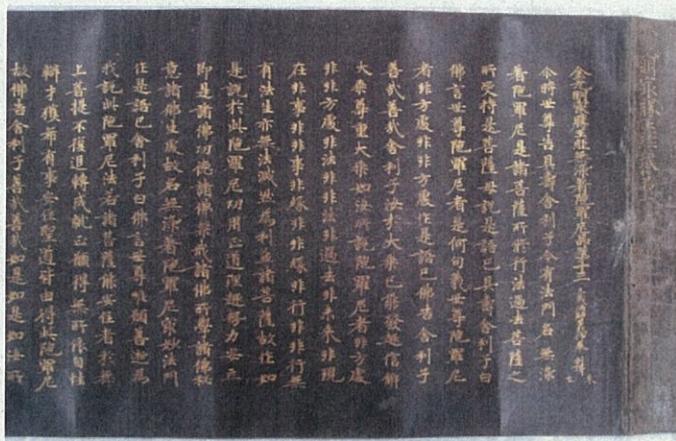
高台径 9.7cm

素地は褐色陶胎で、輻轤成形した大皿である。内面の全面に、左右に下草を配して、茎を上方へとまっすぐに伸ばす芦を中心大きく一本、鉄絵で描く。桃山時代から江戸時代初期に西日本第一の生産地であった唐津窯の作品である。本作品は絵唐津でよく用いられる芦文を大皿全面に伸びやかに描いた典型的な作風を示し、絵唐津を代表する貴重な作品の一つである。

【書跡・典籍】

15 紫紙金字金光明最勝王經卷第七

一巻



重要文化財

(昭和30年6月22日指定)

奈良時代

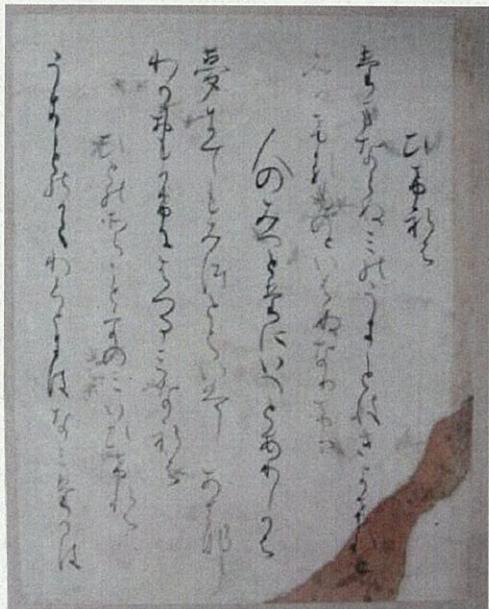
縦 25.8cm

全長 772.0cm

『金光明最勝王經』は護国の經典であり、聖武天皇（701～756）の命によつて全国の国分寺と国分尼寺建立の際に金字の『金光明最勝王經』一部（全10巻）を安置したものとして著名である。

本巻は、そのうちの一つであり、紫色の紙に1行17字の本文を金字の写經体で書写されている。書風・紙質からみて、奈良朝写經の盛時の遺巻と認められる。

本巻は聖武天皇の勅願經というふうにふさわしく、紫紙に金字が燁然と輝き、莊嚴の趣を見せてゐる伝存稀な色紙經の遺例として極めて価値が高い。



平安時代

本紙 縦 20.0cm 横 15.5cm
 掛幅装 総高 137.0cm 総幅 36.1cm

石山切は、西本願寺本『三十六人家集』三十九帖一具のうち、『伊勢集』と『貫之集下』を分割した断簡をいい、本願寺の故地摂津国石山にちなんで名付けられた。本幅は、平安女流歌人伊勢の家集『伊勢集』の断簡で、石山切として巷間に伝来している。現在の体裁は掛幅装であるが、本紙の右端に糊代跡が確認でき、もと粘葉装冊子本であったことがわかる。

料紙は白胡粉地に唐草文様を雲母刷りした唐紙に、銀砂子を散らした白茶色の染紙を破継の技法で右下に組み合わせ、銀泥にて蝶・鳥や紅葉の微細な文様を描き施して華麗である。

石山切は平安時代後期を代表する古筆切の名品で、料紙と優美な仮名とが相俟って、王朝貴族の典雅な美意識を窺わせる点で極めて価値が高い。

【考古資料】

17 山城国花脊別所経塚群出土品

一括

重要文化財（昭和13年8月26日指定）

平安時代



本出土品は、京都市左京区花脊にある丘陵上の経塚群から発見された出土品である。

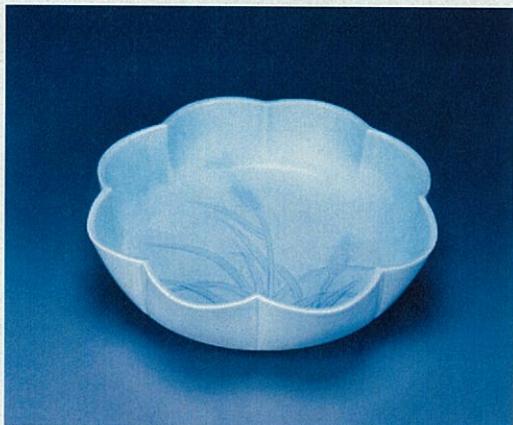
出土品の内容は、銅經筒、陶製經筒などの多彩な經筒をはじめ、独鉛杵、銅花瓶、銅六器、銅火舍などの密教法具や、經筒に納められた金銅毘沙門天立像、和鏡、青白磁合子、鉄刀子、銅錢、紙本墨書法華經残欠などの多彩な遺物で構成されている。

特に、第一経塚から出土した金銅毘沙門天立像と銅筒は、製作年（仁平2（1522年4月）が判明しており、経塚研究の基準資料とされている。

これらは、いずれも平安時代末期における経塚造営の実態と信仰思想の解明に欠かせないものであり、当時の金工・陶芸技術を考える上でもその学術的価値は極めて高い。

【無形文化財工芸技術資料】
18 白磁花形染麦彫文鉢

一点



井上 萬二 作
(重要無形文化財「白磁」保持者)
平成20年(2008)
工芸技術記録映画対象作品
径38.0cm 高さ11.0cm

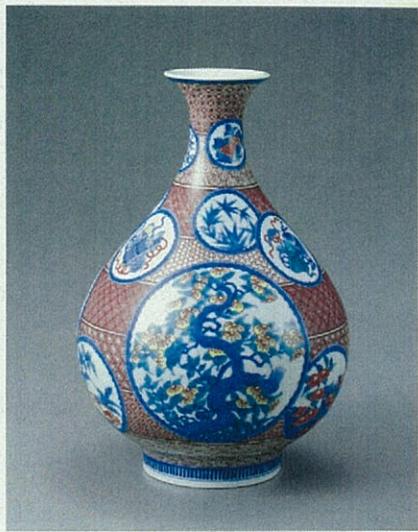
見込みに麦の文様を施した八輪花型の鉢。

天草産の陶石を原材料とし、轆轤で丸い鉢を挽いた後、生乾きの時に口縁部を採寸して8等分し、指を用いて窪みを作り輪花型に変形させた。更に、窪みの内側に磁土を貼り付けてその先端を尖らせ、剣先で口縁部などを削って鋭角的な表情を加えたため、やわらかな雰囲気の中にもメリハリの効いた造形となった。麦の文様の部分には薄い呉須こうすが施されており、爽やかな青色が白磁の白さを引き立てている。麦のモチーフは、厳しい環境に耐えて生きる生命の象徴である。

平成20年度文化庁工芸技術記録映画「白磁－井上萬二のわざ－」の対象作品。

19 色鍋島赤地丸紋模様花瓶

一点



いろなべしまあかじまるもんもようかびん
色鍋島今右衛門技術保存会 作

平成21年 (2009)

最大径20.0cm 高さ29.0cm

口部が開き、頸は細く、豊かに張った胴部を持つ、いわゆる玉壺春形の花瓶である。

赤絵具で充填された地文の中に様々な大小の窓絵が配される。地文は八段に分割され、七宝繋ぎ文、渦文、毘沙門亀甲文、青海波文等の異なる文様が緻密に描き込まれている。胴部中央の三方には、大きな窓が配され、それぞれに橋、ぶつしゅかん仏手柑、桃、桜等の文様が窓いっぱいに描かれている。また、他の中の窓には、宝尽、石榴、竹箪等のいずれも鍋島特有の文様が描き入れられている。高台は、染付で櫛歯文をめぐらす。

重要無形文化財「色鍋島」の保持団体による、高度な技術が発揮された優品である。

20 色鍋島桃文高台皿制作工程見本

九点組



いろなべしまももんこうだいざらせいさくこうていみほん
色鍋島今右衛門技術保存会 作

平成21年(2009)

寸法

(No. 1素焼～No. 5施釉)

径16.6cm 高さ4.0cm

(No. 6本窯焼成～No. 9完成品)

径16.6cm 高さ3.4cm

桃文の文様、高く広い高台を持つ「色鍋島桃文高台皿」は、鍋島の特色を十分に備えた作品である。見込みにやや右に寄せて大きく染付で桃の実を描き、下部前方に緑の葉と花を付けた枝を配し、そして、左側を赤絵具を用いて桃の花で埋め尽くした格調高く、華やかな作品である。高台には、「槍高台」と呼ばれる、剣先状の連弁花文をめぐらせている。本制作工程見本は、「色鍋島桃文高台皿」の制作における素焼きから完成に至る以下の9段階の工程を示すものである。

No. 1 素焼 (主に轆轤を使い、丸物成形・型打ち成形で形を造り、900度で素焼する)

No. 2 伸だち (石州半紙の内側に瓢箪炭で描いた文様を、素焼の生地に写す)

No. 3 染付線書き (伸だちのあたりの線を基に、染付にて筆によって線書きする)

No. 4 染付濃み (濃み筆を使い、線書きの中を塗っていく)

No. 5 施釉 (柞灰を主に調合し、下絵を描いた生地に施釉する)

No. 6 本窯焼成 (赤松の薪を使い、36時間焼成する)

No. 7 赤絵線書き (本窯から上がった生地に赤絵具にて筆によって線書きする)

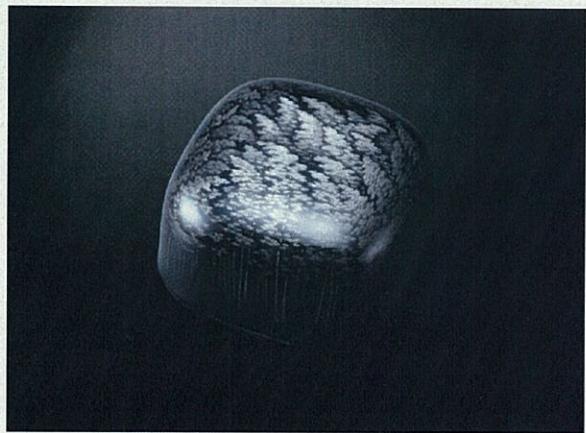
No. 8 赤絵濃み (さらに赤や青(緑)、きび(黄)等で濃む)

No. 9 完成品 (赤絵窯にて、800度の温度で焼成し完成する)

重要無形文化財「色鍋島」保持団体による技術記録として貴重である。

21 沈金箱「幽玄」

一点



前 史雄 作

(重要無形文化財「沈金」保持者)

平成22年(2010)

工芸技術記録映画対象作品

縦25.0cm 横25.0cm 高15.0cm

雪を被った竹林が陽光を浴びながら微風にそよぎ、その傍らを小川が流れる冬の風景を沈金で描いた作品である。沈金の技法は、線彫、点彫、コスリ彫のほか、作者が考案した角ノミによる「一刀彫」の4種。まず角ノミで竹の葉を彫り、次に幹や節の輪郭を丸ノミで線彫りした後、コスリ彫と点彫を使い分けて幹の面を彫り、遠近を表す。さらに剣ノミで竹の葉の間に細かい点彫を加え、その濃淡とぼかしで竹林の奥行きを表現する。粉入れの工程では、プラチナ粉を全体に入れた後、松煙、カーボンを重ね、さらに部分的にプラチナ粉を加え、全体の調子を整えて仕上げる。

角を大きく丸めた印籠被蓋造の箱の木地は、桐材の厚板で作られた指物の箱から、刳物の手法で薄く削り出されたものである。

平成21年度工芸技術記録映画「沈金－前史雄のわざ－」の対象作品。

22 乾漆蓮花食籠

一点



はやし さとる
林 曜 作

平成21年(2009)

第56回日本伝統工芸展文部科学
大臣賞

縦22.7cm 横22.0cm 高15.0cm

底ひなき深奥から湧き出る淨い水が静かに盛り上がり、いままさに連弁の間から流れ落ちるさまをイメージしたという。なるほど、蓋を開ければ、懸子と身にある金平目粉による蒔き暈し円文は、神や仮の存在、あるいはそれの発する靈氣を暗示していて心にくい。黒の蒔き暈しにみる塗り肌の優美さはもとより、氏の卓越した鋭敏な造形力が、馥郁とした蓮花のフォルムに昇華した秀作。
(高橋隆博)

(第56回日本伝統工芸展図録受賞作品解説より)